

Receive stimulation!!

埼玉県立がんセンター 若林 康治

今回の研修への参加の動機は、内容がこれまでの自分の分野に合致していたことが主ではあるが、異国にて最新の技術や知見を多くの仲間と一緒に得ることにより、刺激を受け、自分自身を奮い立たせ、今後の研究へのきっかけを得たいという思いがあったからだ。

7TMRI や蛍光イメージング、PET における新たな Probe や Tracer, MRg-FUS など、Stanford で Research 中の医療技術もやがて当たり前のような世の中がくるのかもしれない。しかし、今日本で行われている臨床医療は決して遅れているわけではないし、むしろ世界と同等あるいはそれ以上の最新技術、知識を持って行われているのではないかと、研修に参加して感じた。

一番の不安は現地での英語であった。講義では Moseley 先生はじめ全ての先生方は非常にゆっくりと解りやすく話してくださったので、自然に英語にも慣れていった。帰国する頃には空港の売店で、無意識に英語で返答してしまうくらいであった。今回の研修の成果の一つと思う。世の中の国際化は確実に進んでいる。学会も当然それを目指さなければならない。しかし発表も論文も、躊躇させているのはやはり英語力であると思う。今回、体感したことは英語に慣れる、すなわち周りの環境が国際化されれば、おのずと英語力が備わるのではないかと。Lucus センターで行っている Research, 3D ラボでの画像処理など、日本の技師は臨床と平行に行っている。放射線技術の広い範囲を世界に通用する技術を保ちつつ、日々研究を行っている。それゆえ、英語力さえ身につければ、国際化はもう目のような気がしてならない。年2回の学術大会において、普段英語に触れることのない環境にいる会員が英語を学べる、英語で発表にチャレンジできる、既に英語力が備わっている会員に対しては国際学会発表や英語論文執筆を積極的に指南する。現在も英語論文誌フォーラムなどあるが、ぜひ豊富に英語に触れることのできる企画をお願いしたい。この海外短期研修も含め、学会の国際化は、ステップを踏みながら進めていくことにより、多くの会員の英語力が少しずつ増して、学会全体の国際化への土台が形成されるのではないだろうか。学術大会の有り方としては、レベルの高揚に異論はない。しかし、入会して間もない若い会員への学術大会参加の敷居を高くしてはいけないと思う。また、学術大会に参加したいが遠隔地であること、職場の人手のやり繰りなど、さまざまな理由で会場まで足を運ぶことができない会員も多いのではないだろうか。学会に入会しているということは、研究に興味を持ち、その機会を見計らっているはず。そのような立場にいる会員の参加を促すためにも、Web 開催やサテライト会場などの試みも提案したい。どのような形であっても、多くの会員が参加できるスタイルを形成することが理想であると考え。何事も参加することに意義があり、参加すれば刺激が必ず付いてくる。そして次のステップに踏み込める、それが学会全体のレベル向上にもつながるのではないかと。私自身、この研修に参加させていただき、そのようなことを再認識した。もし参加していなかったら、加速器の作成過程や Stanford における Research 内容、アメリカの医療現況など知る機会も無く、そしてなにより、全国各地から集まった精鋭たちに出会い、刺激を受けることも無かった。ぜひこのような研修をより多くの人たちが可能な限り経験出来ればと思う。

研修を終えて、これまでとはやや違った新たな視点で今後の自分の業務や研究に取り組むきっかけを得ることができ、気持ちがリセットされた。また、様々な Stimulation は Motivation をおみやげにしてくれた。プレゼンテーションももう少し自分自身磨かなければとも感じた。聞いている人を上手く引き込む Moseley 先生の講義の中での言葉、「テクニックは診断 Quality を左右する」は何気ない言葉であったが、先生がおっしゃると説得力が強く、心に残った言葉であった。



2日目の夕食後、筆者前列中央